
死神が天使にかわる時

中田あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神が天使にかわる時

【Zコード】

N8457C

【作者名】

中田あゆみ

【あらすじ】

目が覚めると、自分は既に死んでいて、さらに死神になつて
いると言わされた。でもそんな記憶はまったくない。マネージャーで
ある変な生き物（？）に言われるままに仕事を始めたが…。

一田田～死の始まり～

一田田

長い長い夢を見る。いつも私に向けられる、あの優しい微笑みは大きな衝撃とともに一瞬にして砕け散る。
そして私の体はもう動かない。
まるで冷凍庫で固められているかのように。

「1」

「かよちゃん、かよちゃんてば！」

ドラ モンをちょっと高くしたような声が何度も何度も“かよ”とこうどこか聞き慣れた名前を呼ぶ。

「うー…？」

「がよ、ぢや、ん…！」

「うわっ！…」

こんなものすごいダニ声をこんな耳元で叫ばれて、飛び起きない人なんてこの世に存在しないと思う。あたしはこの声の主の思惑通りにこの現実へ引き戻されたようだ。

「ほら、はやく起きて！今日もたっぷり仕事があるんだから」

その声の主は、声に似合わずとも可愛らしい姿をしていた。色はまっしろ、形は人魂（？）のようで、頬…と思われる部分はピンク色に染まり、まつげの長い可愛らしい大きな目と、可愛らしい小さな口がついている。そして驚いたことに空中でふよふよ浮かんでいた。

「な、な、な、なによあんた！？」

1テンポ遅れて、あたしはこの状況に焦った。どこの国に人間語を話す人魂に起こされる人間がいる？そんなの空想や夢の中であるにしても現実にはありえない。でもこいつは夢の中のあたしを現実

世界に引き戻した張本人なのだ。

「何つて…。僕はかよちゃんのパートナーじゃないか」

「僕って!? あんたオスなの! ? その顔で! ! ?」

「いやいや、そんなことに驚いている場合じゃない。」

『かよはいつもずれてるよな』よくあいつに言われたつけ。

…あいつ？ あいつって誰だっけ？

……。

ほらまた全然関係ない所に思考が飛ぶ。それどころじゃない。そ

んなことより今はこの状況を把握しなければ。

「あのさあ、パートナーって一体何のパートナーなのよ?」

「何ゆつてるの。仕事のパートナーに決まってるじゃないの」

「仕事? あたしまだ学生で仕事なんて…」

「…もしかしてかよちゃん記憶喪失になつたんじゃない? 学生つて
いつのは生前の事でしょ? 今は死神の仕事に就いてるじゃないか」

「2」

・私はすでに死んでしまつていて靈体になつていてる。

・死神試験という、ものすごい難関試験を通過し、今やバリバリ仕
事をこなすキャリアウーマン。

・死神には、仕事を伝えるマネージャー的立場のパートナーがいる。
それがこの人魂で、私のパートナーはフヨとこつ名前である。

この人魂の内容を簡単にまとめると、つまりこういう事らしい。

信じたくない。信じられるはずがない。

でも信じるしかなかつた。だって、あたしの体はもう物に触れる
事ができなかつたから。話しかけても誰も振り向いてくれなかつた
から。

普通はこんな風に思うと思う。

でもあたしは普通じゃなかつた。全然ショックを受けなかつた。

その現実を『はい、そうですか』と、すんなり受け入れていた。

なんでだう?

「この時、失つた記憶の奥底でほつと安心したような気持ちになつたことを、この時あたしはまったく気づいていなかつた。

「記憶喪失ならじょうがないよね」

そう言って、フヨは本棚から10cm程厚みのある、薄汚れた本を持つてきた。ここは死神としてのあたしの部屋で、起きた時もあたしはここに寝ていた。女の子らしいものは何もなく、それどころか、あるのは古い木でできた最小限必要な家具類だけだつた。どれもこれも、今にも壊れてしまいそうな程古く見える。部屋全体が薄暗く、ちょっと動くと、積み重なつた何十年分かの埃が部屋の中を自由自在に舞う。

この部屋は生きている人が住む普通のマンションの一室で、入るにはちょっとコツがいる。適当な場所で適当な合言葉を言わなければならぬ。その合言葉は、『自由を我らに!』だったが、何の活動をしているのかまったく分からぬ。

フヨが持つてきた本は“死神の基本＆応用知識”と書かれていて、同じように埃を被つっていた。この本を使つていたのはいつなんだろ? あたしつてそんな昔に死んでたのかしら?

「さ、それ全部覚えなおして」

「は!? この本全部! ?」

「当たり前でしょ。知識がなかつたら仕事なんてできないんだから。一時間くらいあればいけるよね?」

「無理だよ! あたし勉強大嫌いなんだから! 本だつてマンガしか読まないんだよ」

そうだ。あたしは勉強とは無縁の女だつた。成績だつていつも中の下くらいで、『勉強しろ』と先生に口づるさく言われたものだ。そななあたしが厚さ10cmの本を一時間で覚えられるはずがない。

頑張つても田次を覚えるので精一杯だろ。本当に死神試験に合格したのかと自分を疑つてしまつ。

「あたし勉強より実践派なの。本読まなくとも、フヨがああしるうしろつて言ってくれたらできるから、もう仕事始めようよ」

「え～…」

「できるひで。一回覚えてちやんと仕事してたんでしょ？やつてゐうちに記憶も戻つてくるかもしれないよ」

「……。ちょっと待つてて」

そう言つてフヨは消えてしまつた。パツと一瞬のつむじ。現実生物じゃないつて分かっていても、こいつのはやつぱりキッときせられる。

「OKだよ。ほんじゃあいこつか

「わやあつー」

フヨはいきなり、消えた位置とは違う、正反対の位置に現れた。ちょうどあたしの真後ろに。まだ慣れてないんだから、そういうことはほんとちやんとわきまえてほしい。

【 3 】

キーンゴーンカーンゴーン。

どこの学校でも同じ、その馴染み深いメロディーは、あたしをとても懐かしくせつない思いにさせた。

由に校舎は、同じ場所で長い間ずっと学生達の成長を見守り、自分自身もずいぶん老け込んでしまつてゐる。まるで、疲れを取り除き、そして労るかのように、春の日差しはその老校舎を優しく包んでいる。その日差しは、あたしにも、同じように優しい温もりを与えてくれようとしているのに、その温かみを感じることができないところは、何とも悲しく申し訳ない。

ざわざわ。

「今日さあ、あの現国の大根のカツラがわー、」 がやがや。

「なあ、数?の宿題やつた?あれつて提出いつだっけ?」

ざわざわ。

ちょうど下校時刻だつたようだ。何人かのグループになつた学生達が、今日起こつた様々な出来事を友達に報告し合いながら、正門の傍にある花壇の縁に座つてゐる、あたしとフロの前を楽しそうに通り過ぎて行く。

あたしからは見えているのに、彼らからは見えていない。とても不思議で奇妙で、そして新鮮だ。

あたしは近づいて、彼らの前で手を振つてみたり、彼らの体を通り抜けたりしてみた。何度もやつてみて、あることに気がついた。見えていないはずなのに、不自然に辺りをキヨロキヨロ見渡したり、感じられるはずもないのに、あたしが通り抜けると、鳥肌が立つたり寒気をうつしたえる人がいる。きっとこれが靈感なんだ。でも、ほとんどの人がそんな様子もなく平然としていて、相変わらずおしゃべりをしながら、楽しそうに下校していく。

ふつと生前の記憶が頭をかすめた。あたしにもこんな時があつた。毎日がとても幸せで、とても充実していたんだ。

戻りたい。

もう一度生きたい。

そう思わないこともない。だけど、何か大きなものがその思いを邪魔する。

戻れない。

戻つてはいけない。

絶対に。

そんな気持ちになる。

でも結局は、戻りたいと思つたとしても、戻れるはずがない。だって、あたしはもう死んでるんだから。

あたしが死んだ時、みんな悲しんでくれただろうか？ちゃんとお葬式に来てくれたんだろうか？親友のユキ、担任の佐藤、そして…、そして…。

『かよはいつもずれてるよな』

あれは…あの低くてダルそうな、それでいて優しいあの声は……。

「かよちやん！あれだよーあの男の子だよー…」

「え？」

フヨ^{みたけなやの}が指^{さす}方向には、確かに、校舎から出て来て一人でこちらに向かって歩いてくる男の子がいた。男の子といつても、高校生なんだから、あたしと年は変わらない…はずなのだ。なのにその男子は、まるで波乱万丈な人生をおくった年寄りのように、妙に落ち着いていた。そこだけ空氣^{くうき}が違^{たが}うのが、遠目からでも分かる。これは死神の力なのだろうか。

「あの人もう死ぬの？」

「うん、三日後だね」

あつさつとフヨが言^うつ。

「死神^{しじん}がとりついてから、ちょいぱり三日後に死ぬんだよ」

「とりつくて？もうとりついてるの？」

「ううん。あとの人に触^ふれて、初めてとりつてことができるんだ」「触れるつて…！？あたしをつ^{さわ}り思いつきり触れちゃったよ！触れどころかもう通り抜けてたよ…どうしよう！なんでもっと早く言つてくれなかつたわけ！？あたしみんなにとりつてちやつたよ…！大量虐殺だよ…！」

「まあ、虐殺ではないよね。確實に」

フヨさんは普通に間違^{まち}いを正してくれた。

「ちょっと…そんなこと本気でどうでもいいよーちゃんと質問に答えてよー！あたし人殺しになっちゃうじやんー」

「まあそれ、死神だから当たり前だよね」

フヨ様はしつかりとおかしな点を見つけてくれる、とても親切な生き物らしい。

「あんたあたしのことからかつてんのー？絞め殺すよー？」

「いや、ボク死ぬとか以前に生きたことないし」

「『ロス……』！」

「ぎやあーうそうそー許してエー！」

何が嘘なのか不明だつたが、あたしがものすごい形相でフヨのしつぽ（のように見える場所）を掴み、手で力いっぱい引きちぎれりとしたのが効いたらしく、泣きべそをかきながらやつと答えてくれた。

「ぐすっ…、あのね、死神だつてこの世界にいるんだよ？ここで仕事するんだよ？仕事してる時にわざわざターゲット以外に触れないように避けてたらキリないし、疲れるし、ちゃんと仕事できないよ。ぐすっ…」

「じゃあ大丈夫なのね？みんな死はないのね？」

「うえっ、ひっく…、うん、死ないよ。ボクたちマネージャーは、死神界にあるターゲット表を見て仕事を選ぶんだ。ターゲットを決めたら書類を書くんけど、その書類を書かないと、例えターゲット表に載つても殺すことができないんだ。ひっく…、もし自分以外の死神が書類を提出してたとしても、ボクたちには殺すことができない。ボクたち自身が書かないと無理なんだよ。ちなみに、一度書類を書かれた人は、ターゲット表に一度と載らないことになつてるんだ。つまり、一回書類書いちゃえば、その人間は書いた死神専属のターゲットつてこと。そういうわけで、かよちゃんには今一件しか仕事とつてきてないから、ターゲット以外に触れても何にも関係ないってわけ」

「え？じゃあさ、このままあの人人に触れなければ、あの人はずっと生きられるんじや…」

「だめだめ！そんなことできないように、ちやあんと最終確認があるんだよね。殺したつていう書類も書かなきやいけないし、すうぐばれちゃうよ」

そしてフヨは、意図的なのか、それとも話続けて疲れたのか、ふうとひと息ついてから言った。

「それにね、あの人を殺すのは必然なんだ」

「？」

「だつて運命の輪が乱れてしまうもの。あの人人がここで死ぬ事は運命なんだ。初めから決められた、ね。だからターゲット表に載つてるんだよ。ここであの人生を生かすことはそんなに大したことじゃない。だけど、違う人が入る予定だつた大学に入学する。違う人と一緒になるはずだつた人と結婚する。本当はいるはずのなかつた子供が産まれ、その子供も結婚する。そうやつて誤差はどんどん大きくなつていき、輪の乱れもどんどん大きくなつていくんだ。わかる？ ボクの言つてること」

そしてフヨは、聞き取れないくらい小さな小さな独り言を言った。
「中には、その運命の輪を乱す、やつかいな死神もいるんだけどね
「俺を迎えたのか」
…」

ちょうどその時だつた。あたしは『それどういう意味？』という、フヨの独り言に対する追求をしようとして、口を開いた瞬間だつた。

「俺は響。よろしく」

そう言つて、今時の若者には珍しく、握手を求める手を差し出してきた。状況が掴めず、開いた口を閉じることも忘れ、呆然としたあたしがやつと気がついた時、既に反射的に手を差し出した後だつた。冷たくも暖かくもない彼の手は、とても印象的だつた。

幽靈のあたしが、どうして人間に触れることができるのか、そんな疑問も浮かばない程に。

そして次の瞬間、開いた口が更に大きく開かれた。

この瞬間から“死”が始まつた。

一四三 ～もう一人の死神～

「4」

「ちょっとかよちゃん…？」

「ハア、ハア…な、なに…？」

あたしは息も切れ切れにフヨに返した。疲れた…。

「何考えてんの？急に走り出したりして」

「いやいや、だつてさー…」

だつて、あたしは響という人を殺すことになってしまった。今まで人間を殺すなんて、当たり前だけど、ちゃんと考えたことなんてなかつたのに、心の準備なしでいきなりこんなことになってしまつたのだ。フヨに言えば、仕方のないことだと、これが運命だとか、結局はこれが死神の仕事なんだからと説得されることだろう。そんなこと分かつてゐる。理屈は分かるし、頭でも分かつてゐる。だけどあたしの心は、まだそれに追いついてない。

記憶をなくす前のあたしは、どんな気持ちでこんな仕事をしていったんだろう。あたしの中にはまだ残つてゐる記憶からすると、あたしは人の死を簡単に考えるような、そんな人間じやなかつた。命の重さは万物すべて平等だと考えていて、蚊に血を吸われている時でさえ、叩くのを戸惑うような、そんな人間だった。

馬鹿なあたしが、わざわざ猛勉強してまで死神になつて、感情を押し殺してまで死神を続けていたというのだろうか？

あたしは走り続けた。どんなにしんどくても、どんなに疲れても、ぜつたいに足を止めなかつた。

それはまるで、人を殺すという現実から逃げてゐるかのようだつた。

「自由を我らに…」

ブーブーブー

「だから、自由を我らにだつてばー。」

ブーブーブーブー！

やつと『ホール』だと『の』に、あたしは最後の難関にひつかつてしまつていた。

「ちよつと、ビーサーことよ？ 部屋に入れないんですけどー。」

自分に対する何とも言えない苛立ちと、早く部屋に入りたいのに入れない苛立ちが重なつて、フヨに八つ当たりしていた。

「かよちゃんの言ひ方が悪いんだよ」

「ちゃんと言ひてるよー。」

「初めは元気なさすぎて判別できなくて、一回は違ひ言葉混じつてたでしょ」

なに、この機械？ 高性能なのか、そつでないのか、一体どっちなの？ こんな時に、明るく元気に『自由を我らにー』なんて言えるわけない。

もちろんフヨにも言わせようとしたけど、ビツヤマネージャーの声は対象外らしく、あつれり却下された。

発声が悪いとか、発音が悪いとか、切るといふが違うとか、挙げ句の果てには、感情がこもつてないといつ理由でことじとく却下され、12回も言ったのにドアは閉じられたままだつた。『今』言葉が合ひ言葉なだけに、何度も連発すると自分が馬鹿らしくなつてきて、回数を重ねる毎に元気がなくなつていぐ。先に今この言葉を変えた方がいい。こんな言葉真面目に言えない。言えば言う程やる『氣』がなくなる。と、考へていただいた時の時、救世主が現れた。

「自由を我らにー！」

あたしとフヨの後ろから聞こえたその声は、まさに完璧だった。これなら声優さんになれるかもしね。

ピーンポーン！

機械はすんなりとその声を受け入れ、部屋の扉を開けてくれた。

「どうぞ。ちよつとコシがいるんだよ、これ」

振り返ると、そこには小学生くらいの少年がいた。鈍いあたしで

も、一目で彼が死神だと分かる。だつて、フヨと同じ種類の生物（？）が、少年の周りをグルグル飛んでいたから。

フヨはといふと、驚きと脅えが入り混じったような目で彼らを見て、『なんで…』と小さくつぶやいたようだった。

「かよさんだね？話は聞いてるよ。立ち話もなんだから、中で話そうか」

そう言つて、少年は自分のパートナーを引き連れて、部屋に入つていった。

なんて大人びた子供だろう。あたしより全然大人っぽい。ぼーっと見送つていると、機械から発せられた恐ろしい声が聞こえた。

ビービー！閉じます、閉じます。

「やめて…！」

あたしは慌てて少年を追いかけた。

中に入るすでに、少年はオンボロ椅子に腰掛け、あたしが入つてくるのを待っていた。あたしは、ちょうど向かいにあるオンボロベッドに腰を下ろした。ベッドから『痛い、やめてくれ！』と喚くような音がして、たくさんの埃が舞つた。

椅子に腰掛けた少年を改めて見てみると、とても不思議な格好をしていることが分かつた。膝丈の着物を着ていて、短い髪を（これはチヨンマゲと言うのだろうか？）頭のてっぺんで一つに結つていた。見た感じ、小学校の高学年くらいだろう。顔に関してはいたつて普通で、クラスに一人はいる秀才風の雰囲気を出してはいるが、子供らしいクリクリとした目には、まだあどけなさが残つていた。実際この目で見たことはないが、イメージで見る座敷わらしそのものだ。

少年のちょうど右肩付近で、フヨと同じ形のものがふよふよ浮かんでいる。色はまつしろ、人魂型、頬はピンク色と、ここまで完璧にフヨと一緒になのだが、大きさはフヨの半分程度しかなく、ちび

る子ちゃんが時折見せる、横長の平べつたい目と、フヨより大きい口がついていた。さらに一番目をひいたのは、顔の大半を占める大きな口のすぐ上に、ちょびひげを生やしていることだつた。

「自己紹介が遅れたね。僕は死神の伝蔵、そしてこっちが田吾作」「ぶつ！」

あたしは思わず吹き出してしまつた。何その名前！ありえない！！
「失敬だな、君は。悪いけど、僕は江戸時代からずっと死神をやつてるんだ。君より一百歳くらい年上なんだからね」

「そうでゲス！年上は敬うべきでゲス！」

伝蔵はいいとして、田吾作は喋り方もありえなかつた。フヨとは違つて、どちらかというとスネくんの声に似ている。

フヨは慣れているのか、田吾作の肩を揉み始めた。本当にその位置が肩なのか不明だけど。「記憶がないそうだね

びくつ！

「ぎやあつ、でゲス！」

伝蔵の言葉に、フヨは誰でも分かるくらい大きなリアクションをとつた。最初の“びくつ！”はフヨのもので、まん丸い体を縦にびょーんと伸ばし、体全体で動搖を現した。そのおかげで、肩を揉む手にかなりの力が加わつたのだろう。説明はいらないと思うが、『ぎやあつ』と叫んだのは田吾作だつた。こんな時にも“ゲス”をつけるとは…。馬鹿らしさを通り越して尊敬に値する。

「今日は何か困つてることがないかと思つて来たんだ。そしたら案の定、部屋に入るのに苦戦してたから、ちよづどよかつたよ。危ないといこうだつたからね」

フヨと田吾作の反応を完全に無視して伝蔵が言った。

「え？どういうことですか？」

フヨが田吾作に平謝りしているのを横目に、あたしは敬語で聞いた。実は年上だから、ということもあるが、この少年はそれ以上に、博士というか何というか、とにかくとても賢い人なんだと感じたからだ。きっとエライ人のだと思つた。それは、フヨの異常なまで

の動搖から見てとつたものなのかもしれない。

「これは制作者の僕しか知らないことだけど、あの機械はね、13回合い言葉を失敗すると、一度と入れなくなるように設定してあるんだ。13日の金曜日にちなんでね。遊び心でつけた機能だったのに、まさか本当にひとつかかりそうな死神が出るとは思わなかつたよ。これからは君みたいな死神がいるということを踏まえて設計することにする。悪かつたね」

…このガキは遠回しにあたしのことを馬鹿にしているのだろうか？
それにしても、やっぱりあたしのカンは当たつていたのだ。この伝蔵はきっと、死神の中でも“お偉いさん”に違いない。死神の世界のことはよく分からぬが、死神になるために試験を受けなければいけないという程だから、死神の昇級試験や、死神レベルなんてものがあつても不思議じやない。

そうなると、あたしが一番低いレベルなのは間違いないだろ。記憶はないが、あたしがそんなに優秀なはずがない。勉強ができるないといふ記憶はしっかりと残つてゐるし。

記憶…？じやああたしは一体どんな記憶を失つてしまつたのだろう？

まずは、そう、あの声の主だ。

『かよはいつもずれてるよな』

度々頭に響く、この声の主がどうしても思い出せない。親とか友達の声はすぐ顔と結びつくのに、この声の主だけはどうしても無理だつた。思い出そうとする、記憶に霧がかかつたようになり、ちゃんと顔が見えないので、だから完全に失つたわけじやなくて、どちらかというと薄れていいる感じに近い。

そして完全に抜け落ちてゐるのは、死んだ時と死んだ後の記憶だ。さつき走つてる時にも考えたが、勉強もできないし、虫も殺せないあたしが、死神なんて職を選んで、それを続けていたなんてどう考えてもおかしい。その理由が、抜け落ちた記憶の中にあるのは間違いないだろ。

そこまで考えた時、あたしは根本的な疑問に気がづいた。

あたしはどうして記憶を失してしまったのか

心理学的なことはよく分からぬ。だけど、何かきっかけがないと記憶喪失にならないのではないか?

それとも単にあたしがずれているだけなのだろうか?

あたしがまたまたよけいな方向へ思考を飛ばしていると、伝蔵は立ち上がり、本棚から“死神の基本＆応用知識”を取り出してきた。

「これ読んだ?」

ページをパラパラめぐりながら伝蔵が尋ねた。あたしはまるで授業中居眠りをしていて、急に先生に当たられた時のように焦り、バツの悪そうな笑顔を浮かべて『いえ、あの、読んでないです』と正直に言った。

また馬鹿にされるだろうと覚悟していたが、伝蔵は『ふーん』と言いつただけだった。あたしを見ようとせず、ずっとパラパラやっている。

「あの、一つ聞きたいことがあるんですけど…」

「ん?なんだい?」

ちょっとシヤクだが、お偉いさんの伝蔵に相談してみようと考えた。お偉いさんなんだから、あたしのことを何か知っているかもしれない。

「あたし、どうして記憶喪失になっちゃったんでしょうか?」

「さあね」

まさしく即答だった…。

なんて冷たいガキなんだ?『困ったことがないかと思つて來た』ということは、あたしが記憶を失して困つてると思つたんじゃないの?てゆうかむしろ助けようと思つて來たんでしょ?もうちゅうと親身になって考えてくれてもいいんじやない?

イライラしていると、伝蔵は急に今までパラパラやっていた“死神の基本＆応用知識”をパタンと閉じ、それがあたしに差し出した。

「もう時間がないから一つだけ言つておく。僕は忙しくて君にしおつちゅう構つてあげられない。何か思いついたり、知りたいことがあつたら、必ずこの本を開くんだ。いいね？」

あたしは、分かつたような分からぬような顔をして本を受け取つた。だつてどう考へても、あたしの知りたいことがこの本に載つてゐるはずがない。あたしの記憶がこの本に載つていたら、それこそプライバシーに関わる重大な問題である。

あ、もしかして、開く人の知りたい情報が出てくる魔法の本だつたりして……？

期待を抱いていると、伝蔵がすかさず言つた。

「言つておぐが、開いた人の知りたい情報が何でも出てくるような、そんな都合のいい本ではないよ」

…あたしの顔は、向かい合う人に気持ちが伝わる魔法の顔なのかもしれない…。

伝蔵が『田吾作、帰るよ』と呼びかけると、田吾作は『わかつたでゲス……』と嫌そうに返事をし、むづくづと起き上がつた。ちょっと見ない間に、田吾作は『あー極楽、極楽』とでも言つようになべつたんこになつてくつろいでいて、フヨは左手で、どこから持つて来たのか大きな葉っぱを使って田吾作に爽やかな風をおくり、右手で田吾作のしつぽを揉んでいた。そんなに体の形を変えられるくせに、さつき肩に力がかかった時、どうしてあんなに痛がつたんだろう？不思議な話だ。

伝蔵の方に視線を戻すと、伝蔵は何かを訴えるような目であたしを見つめた。

「この本には確かに、君の持つすべての疑問に対する答えがある。でもそれは、答えを導くきっかけがあるだけだ。それに辿り着くのも、その先に答えを見つけるのも、すべては君自身の問題なんだよ」そしてゆっくりとあの言葉を口にしたのだ。

「君が自分で考えないと、そうじやないと意味がない」

え……？

なんで知つて……？

「ちょっと、ちょっとまつ……！」

やつと言葉が出た時、伝蔵と田舎作はすでに跡形もなく消え去った後だった。

「5」「おい、かよ！」

低くてダルそうな声は、なんだか立腹のニュアンスを帯びていた。いやいやながら振り向くと、そこに彼が立っていた。そして、恐怖の言葉を口にする。

「今日の予定は勉強会に変更する」

「えええええ！？」

今日は期末考査の結果発表で、あたしの順位は、320人中315位だった。彼にバレるのだけは避けていたのに、どうしてこんなに早く情報を掴んだのだろう。コキが物に釣られてしゃべっちゃつたのかしら？ それとももしかして、盗聴器でも仕掛けてるんじゃないでしょ？

「ボスッ！」

「ぶつ！」

彼の体操着を顔面に受けた。

「また関係ないこと考えてたる。この妄想族が」

「違うよーちゃんと繋がりある」と考えてたんだよー。」

「とにかく今田は一日勉強だからな」

ひしゃりと言つ。こんな時の彼には逆らわない方がいい。文句を言えば言つほど、彼は勉強の鬼に変身するんだから。

彼の家は学校から歩いて10分くらい。高校生にしては珍しい一人暮らし。あたしの家はちょっと遠いから、だからいつも彼の家で勉強している。たまーにお母さんが様子を見にやつてくるんだけど、お母さんはとても優しい人で、『あんた鬼よ。そんなんじゃ覚えるものも覚えられないわよね、佳代ちゃん？』といつも庇ってくれる。将来お嫁に来たら、きっと仲良くやつていけるんだろうな、と想像して、一人で勝手に赤くなつた。そんなことばかり考えている

から、妄想族と言われるのだろう。

彼の家に着いて、お母さんに挨拶をし、彼の部屋に入った。彼の部屋はいつも、ギターやら雑誌やら参考書やらでじゅうた返している。今日ももちろん例外じゃなかった。あたしの部屋の方がよっぽどきれいなのに、どうして彼の方が勉強できるのかな、といつも思う。彼は頭がいい。部活もしてバイトもしてゐるのに、どうしてそんなに頭がいいのか、さっぱり理解できない。

「そこに座りなさい」

勉強机を指差して彼が言った。ぱっちり先生モードである。おとなしく机に向かって、テスト問題と答案を出した。テスト後の勉強会は、いつもテストの見直しから始まるのだ。

「じゃあテスト問題をもう一度解きなさい。一番悪かった日本史から始めるように」

またまたおとなしく問題にとりかかる。・・・・ふう、わからない。考えたけど、どうしてもわからない。テストを受けたのはもう三日も前のことだ。このあたしが覚えているはずがない。

回答を見ながらやつていいの?と思いつつ、カバンから先生にもらつた回答用紙を出そつとすると、彼があたしの手を静止した。

「一回ちゃんと考えてから答えを見るように」

そして、もう耳にタコになつてゐるあの言葉を吐いた。「かよが自分で考えないと、そういうないと意味がない」

「…よちやん…」

「ん?

「かよちやんつてばー」

「うー…?…ぎやあつー」

目を開けてみると、こきなりフヨのドアップだった。あたしは驚いて、ベッドから勢いよく落ちた。

「…つたあ…」

フヨが心配そうに覗き込み、「そんなに驚くなんて…、まさかま

た記憶喪失になっちゃった?』と聞いた。

記憶…？ そうだ…！

朝になつて、フヨがマネージャー会議に行つてくると、『…』と言つて出て行き、その間あたしは、『あの言葉』について考えていたのだ。伝蔵が言つたあの言葉を…。

「自分で考へないと、そつじやないと意味がない」
あたしはこの言葉を知つっていた。

夢を見た。

そして、夢の中の彼が言つた。あの低くてダルそうな声で。
「自分で考へないと、そつじやないと意味がない」
あれは一体誰…？
伝蔵…？

夢の中でも、顔にはやつぱり霧がかかつていて、よく見えなかつた。

「ねえ、伝蔵つてどうこいつ子供なの？」

「よかつた！ 記憶喪失になつてないんだね？ 記憶失くされたら、また最初から全部やり直しから本当によかつた」

と、フヨは泣きながら喜んだ。

「物覚えが悪くて悪かつたわね」

あたしはフヨを思いつきり睨みつけた。

「…そういう意味じゃないよ？ へへ」

フヨが焦つて訂正し、『伝蔵くんはね、今年で死神暦180年のベテランで、毎年成績一位のとても優秀な死神なんだ。180年も死神やつてる人つてすごく珍しいんだよ。みんなある程度したら転生しちゃうからさ』と教えてくれた。

「へえ。死神になつても転生できるんだね」

あたしは、伝蔵とあまり関係のない、素朴な疑問を口にした。

「そりやそうだよ。同じ魂なんだからね。死神の職業につく入つて、

死神の仕事に憧れてなる人もいるけど、この世に未練があつて、もう少し見ておきたいっていう人がほとんどなんだ。例えば、家族のことを見守りたい、好きな人が死ぬまで待ちたい、とかね。だから、その目的が達成されたらほとんどの人はみんな転生しちゃうよ」「え？じゃあ地縛霊とかつてあるでしょ？あれはどういことなの？」この世に未練があるんじゃないの？」

「一つは、昨日も言つたけど、死神試験っていうのは本当に難関なんだ。だから毎年落ちる人がたくさんいるんだよ。その試験に落ちて、それでもこの世に留まりたいっていう靈が、人間の言つそういふ靈に分類されるんだ。試験科目には、人間に見えるように靈気を高める、物を動かす、っていう実技もあるんだけど、その勉強をした靈はその能力も備わってるでしょ？だから人間界に影響を与えてやうんだよね」

悲しそうな顔をしていたフヨが、一転して今度は憤慨しながら言った。

「もう一つの理由はね、成績を上げようと死神のせいさー。」「え？どういふこと？」

「死神の成績は数字で表されるんだけど、生命力が強い人間ほど、殺した時の数値は高くなるんだ。つまり、生命力が強い魂ほど、殺すのが難しいってことね。だから、伝蔵くんのように能力の高いエリート達は、生命力の強いターゲットを数人狙えばいいんだけど、普通の死神は、そんなに強いターゲットは殺せないでしょ？だから数を増やすとするんだ。それで、殺すことばかりにこだわって、アフターフォローがちゃんとできてない死神がいるんだよ。ちゃんと靈界へ連れて行つてあげないから、靈はどこへ行けばいいのか分からなくて、その場所に留まることになつてしまつ。ひどい話さ」「自分も人間だつたくせにねー」「そう思うでしょ！？」

フヨはブンブン！と自分の口で効果音を出していた。

「うーん。それじゃあ伝蔵は、まだ何かやり残したことがあるのか

な？」

と、あたしは伝蔵へ話を戻した。あたしの問いかけに対しで、『どうだろ？ね。幼馴染がどうのつていう話は噂で聞いたことがあるけど、もう一八年も前のことだからね。きっと死神の職業が好きなんじゃない？』と、フヨが適当に返す。まだ腹の虫がおさまらないのだろう。今度はプリプリへ効果音を変えていた。なかなかおちゃめである。

結局、響くんの学校が終わる時間まで、ずっとぼーっとしていた。部屋の中には、骨董品に分類されるような古い古い時計があつて、どうして死んでるのに時間が必要なのかと聞いたら、人間の時間を把握しないと仕事がやりにくいから、ということだった。伝蔵に本を読めと言われていたけど、どうしてもそんな気分になれない。フヨの話によると、殺すためには念というものをターゲットに送らなければいけないらしい。また殺すために響くんのところへ行かなればならないと思うと、気が重くて、本を読むような気分にはどうしてもなれなかつたのだ。

「一ーン、一ーン、一ーン　　重々しい音で、時計が3時を告げた。フヨは『おつと、そろそろ響くんの学校が終わる時間だ。さあ、行こつか』と、まるでピクニックに行くかのように元気よく言った。あたしはフヨに急かされながら、重い足取りで部屋を出て行った。

〔 6 〕

昨日と同じ風景。学生達が楽しそうに通り過ぎていく。老校舎は今日も同じようにそこにあって、太陽が優しい光で包んでいる。あたしは昨日と同じように、花壇に腰掛けた。腰掛けているように見えるだけで、結局は浮いているんだから、しんどくない空氣イスと

「いつことになる。昨日のように楽しむところにはなれず、ぼーっと学生達が通り過ぎるのを見送った。

「念はね、想像力が必要なんだ。いろんなバージョンの死に方を想像するんだよ。あ、でもそれって、かよちゃんの得意分野だよね。だつて妄想族だもんね」

フヨが横で“念の送り方”をしきりに説明していたけど、あたしは右から左へと、話を流していた。じつじつことは得意中の得意だ。“妄想”と“話を流す技”は、授業中“居眠りせず授業を聞かない”ために、よく使った手段だった。あたしは、念を送るつもりなんてさらさらなかつた。死神だから仕方ないのかも知れないけど、これ以上人の死を願うのが、どうしても嫌だつたのだ。

15分ほど経つたころだろうか？校舎から、昨日と同じように、他の学生とはどこか違う雰囲気を持つた男の子が出てきた。響くんだ。

あたしを見つけると、信じられないことに、うれしそうな顔をして手を振り、走つて近づいてきた。

なんどよー？あたし殺しに来たんだよー？

あたしは逃げようとした。だけど、フヨにがつしり足を掴まれて逃げられない。

「あんた若い女の子の足にへばりつくなんて変態かーーー！」

「ちよちよちよちよちよー！意味わかんなこと言つて貶めよつとしないでよー何考えるのせー何逃げようとしてるのさー昨日と同じことしてないで、早く念送つてよーーー！」

フヨは、あたしのなすりつけに多少同様したようだつたが、あたしの根拠のない発言に免疫ができてきたのか、足を離してはくれなかつた。

「ていうか何で響くんはあたし達のこと見えてるのよーそんな人に念を送るなんて、そもそも間違いなんじゃないのー？」「そんなの僕だつてわかんないよーだけど、別に見えてたつて、念は念じるだけなんだからどっちでもいいんだよー！」

そこまで言つて、フヨはあることに気がついたようだつた。……

かよちゃん？ボクの話全然聞いてなかつたでしょー！」

「げつ！

バレた・・・！ フヨはますます強い力であたしの足を掴んだ。あたしとフヨは一歩も譲らない攻防戦を繰り返した。しかし、この勝負は結構前からあたしの負けが決定していたようだ。

『…ふつ』と、あたし達のすぐ後ろから笑い声が聞こえた。

声がした方を振り返ると、そこにはすでに、響くんが立っていた。フヨも必死だつたので、響くんが居ることに気づいていなかつたのだろう。響くんを見て、ほつと一息ついたかと思うと、すぐにわざわざ口で『にやり』と言つて、勝ち誇つたような表情を見せた。

むかつ！あたしはフヨのほっぺたを、思いつきりつねり上げた。

「俺昔から靈感が強いんだ」

死神にとりつかれた人間“響”、フヨ、そしてあたしの三人は、学校近くの公園で話すことになつた。死神にとりつかれた人間が、当の死神と話をするなんて、前代未聞じやないだろうか？ だって、死神の普通はどうだか知らないけど、幽靈が見えたり幽靈に触れられる人間は、絶対普通じやない。

この公園は学校の裏に位置し、野球ができるくらい大きな運動広場、そしてその周りには、緑いっぱいのマラソンコースが設けられ、遊具は公園の隅に全体の10分の1しかないという、運動重視の公園だつた。学校の裏だといふこともあるが、公園を挟む形で総合病院も建つていたので、昼間は学生や入院患者など、たくさん的人が訪れる憩いの場になつていて了。あたしたちはマラソンコースにある、めつた人がこない、入り口から一番遠いベンチに腰を下ろした。

「響くん、あなた知らなかつたとはいえ、とんでもないことをしかしてしまつたのよ。あたしは死神なの。あたしと握手なんてしたから、響くんは三日後に死ぬことになつちゃつたんだから。…あ、言つちやつた…」

いくらなんでも、『あなた三日後に死にます』と言わされて、ショ

ックを受けない人間なんていない。あたしつてほんとにバカだ…。

ところが響くんは、動搖したようには見えなかつた。それどころか、信じられない言葉を吐いた。

「知つてるよ」

「へ？」

「あんたが死神だといふことも、死神に触れたら三日後に死ぬつてことも」

……。さすが靈感が強いだけある。それじゃあ握手してきたのつて、もしかして…。

「俺は死にたいんだ」

…やつぱり？

どう言葉をかけたらいいのか分からず、フヨに『助け舟を出してくれ』というメッセージを込めた目線を送つてみた。フヨは、そのメッセージをしつかりと受け取り、

「悪いんだけど、死ぬのはちゃんと三日後にしてよね？スケジュール調整が面倒だから」

という、沈みかけ…いや、もつすでに沈んだ助け舟を出してくれた。

フヨに助けを求めるなんて、あたしつて正真正銘のバカだつたのね…。

「えつと…、響くんはどうして死にたいと思つてるの？」沈黙に耐えられず、苦し紛れに出た言葉。

これもバカな質問だつただろうか。死にたい理由なんて聞いてどうなる？理由はどうあれ、彼は死ぬ事が決定したんだ。それもあたしは死神だ。理由や事情なんて関係ない。死にたくても死にたくないくとも、そんなの関係ない。ただ、とりついて、殺して、そして魂を連れて行くだけ。あたしに理由を話したところで何も変わらない。響くんは、あたしの問いかけには答えず、立ち上がって空を仰いだ。もうすでに日が暮れていて、夜空だつた。たくさんの星が、所

狭しとひしめきあつてゐる。

「変わつた死神だな」

そうぽつりと言つて、あたしの方を振り返つた響くんの表情には、悲しみ・苦悩・せつなさといった、様々な負の感情が入り混じつていた。

「理由なんて何でもいいだろ?とにかく俺は何度も死のうと思つた。でも、死神が来てくれないと、どうしても死ねなかつた。一命を取り留めてしまふ。だから君が来てくれたことには本当に感謝しているよ」

嬉しそうに響くんは言つ。

「三日後が楽しみだ」

少し間を置いて、優しい微笑みを浮かべて響くんは言つた。
低い声だったのにもかかわらず、その声は妙に公園に響いた。

一三田三 ～かよの疑問～

一三田三

〔7〕

「かよちゃん、こつまでここに居るつもりなのや。もひ歸らひゆ
誰もいない公園。当たり前だ、もつ夜中なんだから。公園の時計
を見ると、午前一時をまわっていた。幽霊達が活発に行動すると言
われる丑三つ時である。

あたしは響くんが帰った後もずっとここに居た。何をするわけでも
なくずっと…。ただ響くんの言つた『三田後が楽しみだ』という
言葉だけが、頭の中で繰り返し繰り返しリピートされていた。

「どうしたの？」

フヨが心配してあたしの顔を覗き込んだ。

「かよちゃん！？泣いてるじゃない！…どうしたのさ、一体！」

自分でも気がつかなかつた。あたしの頬をとめどなく涙が流れて
いた。『魂だけになつても涙は流れるんだ。でもその水分はどこか
ら来てるんだろう？』と、そんな余計なことを考へる余裕があつた。
だつて、あたし自身どうして自分が泣いているのか分からぬのだ。
「かよはいつもずれてるよな」

また、あの低くてダルそうな声が聞こえた。

確かにあたしつづれてるね。自分のことも分からぬなんて。
響くんのことは確かにショックだつた。死にたいと思うなんて悲
しそう。だけど、死神であるあたしがそんな風に思うなんて変だ。
あたしのせいで“死”が確定してしまつたのに、どうしてそんな風
に思えるというのか。

わけがわからないまま、あたしはフヨに『帰らひつか』と言つて、
やつと公園を後にした。

「お前が自分で考えないと、そうじゃないと意味がないんだ」

またあの声が聞こえた。振り返って公園を見渡したけど、誰もいなかつた。

「 8 」

「 あの人…、あたし女優の才能ないよ」
「 見ればわかるよ」

「 ちょっと、それどうこいつ意味よ！顔つてこと…？殴るよ…。」
「 こつたあーもう殴りしるじやないかーそのすぐ殴る癖なんとかしてよー。」

フヨは、あたしにひっぱたかれた左ほっぺたを、両手でおおえようとしながら言った。（でも右手が届かないからおおえきれてない）

昨日に続いて部屋の前で足止めを食つわたしたち。昨日みたいに伝蔵が来てくれたらしいんだけど、1-2回失敗したあたしは遠い目をしながら思つた。

と、その時だつた。特殊な力があるのかもしないと思つ程グッドタイミングで伝蔵が現れた。

「 あきれて物も言えないよ」

第一声から相変わらずひどい言い様である。あたしはちょっとムカつとしたが、ドアを開けてもらつために我慢して、愛想よく振舞うことにした。

「 すみません、こんな時間に…。睡眠時間を割いてまで来ていただきとうれしいです…つ」

最後に舌を噛んでしまつたが、こんなに下手にでているんだから、伝蔵はドアを開けてくれることだらつ。一つや二つイヤヤミを言われるかもしれないが、それくらいなら我慢できる。

「 君、そんな丁寧な言葉喋れるんだね」
おさえて、おさえて…。

「 でも、恐ろしく似合わない」

我慢、我慢…！

「でも逆に馬鹿を露呈してしまったわけだけだね」

……は？

「はあ……、君やつぱり本読んでなかつたんだね。魂に睡眠なんて必要ないんだよ。眠たくなることがないんだ」「え……？ そうなの？ でもあたし眠たくなつたんだけど……。

「その分だと、どうやら君は眠たくなつたようだけど、まあ君は例外だつたつてことか。分からぬことは本を調べるよつこと言つておいただろう？」

『……えへへ』と、あたしは愛想笑いで『まかしをはかつた。

「……じゃあこいつしよう。今日一晩中勉強するなりこのドアを開けてやつてもいい」

これは完全に伝蔵の誤算だつた。承諾するのを前提とした条件を出したつもりだつたのだろう。伝蔵にとつて勉強はそんなに苦ではないのだ。でもあたしにとつて、部屋に入れないのと徹夜勉強とは、はるかに徹夜勉強の方がイヤだつた。あたしは最後に13回田の合言葉を言つて、無理ならもつ入れなくともいいやと思つた。

大きく息を吸い込み、全身全靈をかけて合言葉を言おうとした、その時だつた。

「じ：もがつ！」

「自由を我らに・・・・・」

ピーンポーン！

「……君は一体何を考えているんだ？」

抱きかかえるようにしてあたしの口を押さえながら、伝蔵があきれたような表情を見せた。今まで何度かあきられたけど、こんなに感情的な表情を見たことがなかつた。伝蔵はいつも状況に合わせた表情を意図的に作つてゐるだけで、あきれるならあきれるという一つの感情しかなく、その中に様々な感情が見えることがなかつた。そつ、ロボットみたいだつたのだ。だけど、今はとても人間らしい複雑な感情が表情に表れていた。あきれてはいるけど、焦りや驚き、安堵感などが合わさつた複合的な表情だつたのだ。

「かよちゃんは何にも考えてないよ」

「どうせ馬鹿なだけでゲス」

マネージャーたちの声にはっとして、伝蔵はあたしから手を離した。顔を背ける伝蔵の横顔には、少し赤みが差していた。

「…勉強するように」

それだけ言つと、伝蔵は部屋に入ることもなく、そのまま消えてしまった。

「で、伝蔵くん…？ でゲス！」

置いていかれた田吾作は、文法的に無理のある言葉を吐いてから、追いかけるように慌てて消えた。

残されたフヨガ、あたしに怯えていたようだけど、あたしはやつきフヨガ言つた言葉なんてまったく聞こえていなかつた。ただ、伝蔵の人間らしい表情がとても印象的で、そのことで頭がいっぱいだつたのだ。

部屋に入ると、時計の針は午前四時を指していた。

「しまつたなあ…」

あたしはベッドに横になつて、後悔の念に苛まれていた。伝蔵には聞きたいことがあつたのに、どうしてそれを優先して聞いておかなかつたのか。伝蔵の表情が印象的すぎたのもあるし、その後にすぐ消えてしまつたので、聞くことができなかつたのだ。

「ねえ、フヨ」

フヨは机の上に乗つて、手帳に何やら書き込みをしていた。きっと仕事関係のことだね。もうすぐ朝のマネージャー会議が始まる時間ということもあり、とても忙しそうだつた。ワンテンポ遅れて、フヨは「なーに？」と、手帳に田を向けながら答えた。

「フヨも伝蔵も消えて移動できるでしょ？ あたしも死神なんだからできるんじゃないの？」

「んー？ それはちょっと無理なんだよね。かよちゃんはそこまで力つけてないからさ」

意識は仕事に集中しているのだな。あたしの方を見ずにそれだけ言った。

もしできるなら、今から伝蔵のところへ行きたいところだけど、あたしに力がないなら仕方ないな、とあきらめた。別にこれから先伝蔵と会えなくなるわけじゃない。死神同士なんだから、またすぐ会うことになるだろ。

次に会った時、絶対聞かなくてはいけない。

「自分で考えないと、そうじゃないと意味がない」

どうして伝蔵がこの言葉を知っているのかということを。

「あふ……」

また眠くなってしまった。やつぱりあたしつて特殊なのかな……？
意識が薄れていく中、伝蔵の表情が浮かび、そして笑顔になつた。初めて見る笑顔だったけど、あたしの妄想の技術が秀でているからなのか、とてもリアルで、とても優しいものだつた。そしてその優しい笑顔がゆっくりと違う人の顔に変化した。あれは……、響くん？

そして、『三日後が楽しみだ』いう言葉が聞こえた後、すべての光が消え、一瞬にして真っ暗になつた。

あたしはそのまま、眠りの世界へ落ちていつた。

一四三 ～やるべまいよ～

「9」

「アリ」

「何で見てるんだ?」

「すごいから」

「何が?」

「だつてね、アリは自分の体の何倍も大きいものを運ぶんだよ」

「で?」

「人間はどう? 無理でしょ」

「そうだけど…。もっと他のもの見ないか? ていうか見るべきだと
思う。せっかく動物園来てんだから」

「でもね、例えばアリが人間と同じ大きさになつたとしたら、人間
よりも遙かに強いと思うの」

「うん、だけど…」

「繁殖能力も高いから人間なんてすぐ滅びると思つの」

「そうだけどさ、今は…」

「アリが小さくてほんとによかつたよね! んじゃあ次キリンさんい
こつか!」

「いや、次も何もアリは…」

「なあに?」

「はあ。ほんとにくよつていつでもずれてるよな
彼はあきれた表情を浮かべる。

でもあたしは知つてる。

ほんとは全然あきてないの。
だつて、とつても優しい声なんだから。

…ン、ゴーン

「あー…?」

「…何見てるんだ?」

— „π-γ, π-γ, π-γ, π-γ, π-γ, π-γ, π-γ, π-

「うるさい」

激しい且つしつこい時計の音で目が覚めた。

卷之二

時計の針を見て焦った。寝なくてもいいはずなのに、しつかり7時頃起きてしまっていいのか。

フロアは、マネージャー会議が長引いているのか、まだ帰ってきておらず、机の上には『2時くらいに帰る』と書かれたメモが置いてあります。

二〇

アリが帰ってきて来るまで勉強しようかな…」

何も勉強せず寝てしまつたことに負い目を感じ、伝蔵に申し訳ない
ような気がしてきた。

今までのようになつたらしい伝蔵だったら、そんな風に思わなかつたかもしれない。だけど、あの人間らしい表情を見て、伝蔵が本当にあたしのために言つてくれているような気がしたのだ。

あたしはベッドから起き上かり、机に向かって“死神の基本&応用知識”とにらめっこした。『この本には確かに、君の持つすべての疑問に対する答えがある。でもそれは、答えを導くきづかけがあるだけだ。それに辿り着くのも、その先に答えを見つけるのも、すべては君自身の問題なんだ』と、伝蔵は言っていた。一体どういうことなんだろう? とりあえず、何かの暗号なのかと思ったあたしは、文字を組み合わせたり、アルファベットに直してみたりした。

ダメだ。

結果、やっぱり普通の日本語だということが分かった。

『すべての疑問に対する答え』っていうことば、あたしの記憶のことも、あの声のことも全部つてことよね？

諦めて、一つずつ言葉を理解しようと試みた。

でも、それは『きつかけ』なんだから、そのまま答えが載つてい

るわけではないのね？

だんだん頭が痛くなってきた。

それで、ええと…、『きっかけに辿り着くのも、疑問の答えを見つけるのも、あたしの問題だ』と、そういうことよね、たぶん…。そして自信も無くなってきた。

つていうか子供のくせに何で暗号みたいな言葉使つの？もっと簡単に言つてよ！本当に賢い人つていうのは、相手に合わせて言葉を選べる人のことを言つんだから！

慣れない国語の勉強（？）をさせられてイライラが募り、一通り逆ギレ文句を言つてから、落ち着いたところでひとまず何か調べてみる事にした。

疑問か…。あ、そういうえば、昨日公園で涙が出た時、何で死んでるのに涙が出るのかなって不思議だったんだ。それ調べてみよう。本の最後にある索引から『な』を探す。

あ、あつたあつた！34ページつと。

34ページの表題は、『生きてる時と同じ感情表現』となつていた。

なになに…。

“死神に関わらず、すべての魂は、悲しみや喜びで涙を流したり、焦りで汗を出すことはありません。しかし生前の記憶から、状況に合った感情表現の方法を、知らず知らずのうちに選び出し、それを知らず知らずのうちに自分の力でホログラム化することができます。”

“へえ…。じゃああの涙は自分で表現してたつてことか。

“同じように、眠たくなつたりお腹が空いたりするのも、記憶から出てくる状態であつて、実際に魂がそのような状態になることはありません。”

ああ、昨日伝蔵が言つてたのつてこのことなんだ。そういうえば、眠たくなる時つていつも考え方してるもんねー頭使うの嫌いだったから、昔つからすぐ眠たくなつてたもん。……つてー何納得してん

の、あたし！？寝る必要ないのに寝るとか馬鹿じゃん！だから伝蔵が馬鹿を露呈したとか何とか言ってたんだ！やっぱあいつむかつく……！

一人ノリ突っこみをしてから、一人でもかついて、そしてもつと他に疑問はないか考えた。うーん、他に何かあつたっけ？

あたしは死神として生活した日々のことを思い出した。（記憶があるのは一日だけだけど……）改めて思い出すと、フヨはとても大変だと思う。記憶を失くしたパートナーに死神の基礎から教えるのだ。さらに、勉強が嫌いだというあたしの我儘に振り回されて、その都度口で説明している。

…………あ。

そういえば、昨日フヨがなんか言つてたよくな……なんか運命の輪がどうとか……。そう、あれはフヨの小さな独り言だった。

『中には、その運命の輪を乱すやつかいな死神もいるんだけどね……やつかいな死神？アフターフォローをしない死神の他に、どんなやつかいな死神がいるんだろう……？運命の輪なんていう壮大なものを作り出すのだから、相当なやつかいものだ。

えーと、えーと……。

あたしは索引で『運命』を引き、858ページを開いた。

全部で1000ページもあるこの本のうち、140ページ程は索引だったので、858ページはこの本の最後の項目だった。表題は、『死神が決してやってはいけないこと』となっている。内容は大きく二つに分類されていた。

“1、殺した靈は必ず最後まで責任もつて引率すること。”

これには、昨日フヨが説明してくれた内容と同じことが書かれていた。途中でほつたらかしにすると、じばく靈になり、死神が靈をほつたらかしにしてしまう原因の第一位が、成績をあげたいがため、となつていて、たくさんの人を殺して成績をあげよとする死神は、本物の死神ではないと批判している。

責任意識のない死神が増えていくという現状を危惧して、もともと殺した時点で成績に加算していたところを、ちゃんと死者の国へ送り終えるまでに変更しようという動きがあるらしい。“最後まで見届けよう人間の最後を！”というキャッチフレーズも記載されていた。

多少キャッチフレーズが気にかかつたが、今はそんなことどうでもいいので、とりあえずスルーした。

そして、次の項目が田に入った時、あたしは両目裸眼2・0を疑つた。

“2、生き延びないように最後まで職務を遂行すること。”

…え…？
…生き延びる…？

でも…、そうか…、そうだよね。運命の輪を乱すつてことは、つまりそういうことなんだ。（今気づいたけど、）確かにそれしか方法がない。でも確かフヨは、そんなことができないようにな、ちゃんと最終確認があると言っていた。ということは、最終確認で引っかかるないような、そんな方法があるつていうこと…？

「かよちゃん、そろそろ行こつか

いよいよ“2”の内容に入ろうとした時、突然フヨの声がした。

『え…！？』振り返ると、ベッドの上にフヨが居て、ニコニコしながらあたしを見ている。

「いつ帰ってきたの！？」

「うーん、一時間くらい前なんだけど、せっかく勉強してるのにもつたいないと思つてずっと見てたんだ

「なんかもつたいないってのが気にかかるけど、まあいいや。でも行くつて、どこに行くの？」

あたしは本を閉じて、ベッドに向かいながら聞いた。フヨは、手に持つているスケジュールと書かれた小さなメモ帳を見ながら、『

もうそろそろ響くんの学校が終わる時間なんだ。念を込めに行こかなくちゃね』と、昨日に続いて、またピクニックにでも行くかのよう元気よく言った。

「え！？ もうそんな時間なの！？」

慌てて本棚の横の時計を見ると、フヨが嘘をつてないことがわかつた。時計の針はもうすぐ三時を指そうとしていたのだ。自主的に勉強したことがないあたしが、三時間も勉強していたなんて…と、自分に驚いた。

そしてフヨが、あたしの心を読んでいるかのように言つた。 「

奇跡だよね

『一ーン、二ーン、三ーン、四ーン！

今は三時。一回余分に鳴つた時計の音が何だったのかは、ご想像にお任せしそうと思つ。

〔10〕

今日もいつもと同じ風景だつた。校舎も太陽も、学生たちも何も変わつていらない。まるで同じ日を繰り返しているようだつた。人々は毎日大きな変化を求めているわけじゃない。記憶に残るのは大きな出来事なのかもしれない。だけど、将来大人になって、こんな風に平和な日々が積み重ねられた結果、高校の時は楽しかったとか、あの頃はよかつたとか、思い出すことになる。だから何もない平凡な毎日でも、きっと自分の中に何かを残して、きっと自分の成長に役立つているはずなのだ。彼らの平和で楽しそうな表情を見ていると、あたしは自分が死んでいるということが急に悲しくなつた。あたしもいつもと同じように花壇に腰掛けていたけど、あたしだけは同じようにしてしても、決してその輪の中に入つてはいないので。『三日後が楽しみだ』

その言葉が頭から離れない。それがとても重い。響くんは生きている。望んで生きられるわけじゃない。生きたくても生きられない人だって、この世の中には存在するのだ。『死にたい』なんて、そ

の人が聞いたら何て思う？響くんが何で死にたいのかなんて知らないけど、贅沢で傲慢で、考え方がとても子供じみてて、浅はかだと思つ。死ぬといつこどが一体何を意味するのか分かつていないのでから。

どんな理由があつたにせよ、生きなければいけない。『死にたい』なんて、現実から逃げているただの弱虫ではないか。

そして、その響くんを殺すんだと思つと、あたしはやり切れない気持ちでいっぱいになつた。

チラツと、フヨの方を見る。フヨは、学生達の中に響くんがいないか探していようだつた。学校に来る途中で、フヨはまた念の送り方を教えてきた。あたしは、相変わらず右から左へ聞き流していたけど、一つ気になることがあつた。

“念を送る”のも、本にあつた“2、生き延びないよ”に最後まで慎重に職務を遂行すること”的なのだろう。

あたしは念の送り方なんて知らない。

あたしの力が未熟で、念を送れなかつたら、響くんは生き延びられるのだろうか？

フヨに確認したかつたけど、言えば、良からぬ考えをめぐらしているのがバレるのではないかと思つて聞けなかつた。

でもやつぱり気になる。聞こうか聞かまいか悩んで、チラチラ見ていると、フヨがその視線に気づいた。そして、『心中察するよ』

みたいな顔をし、安心させるように言つた。

「響くんみたいな人間は、念なんて送つても送らなくともあんまり変わらないから、安心していいよ。死にたい人間を殺すのは、かよちゃんみたいに力や知識がなくつても簡単なんだ。でも、まあ、一応ね。やることないし、これからのためにも練習がてら、ね」

完璧に勘違ひしていたが、運良くあたしの聞きたい情報が手に入つた。でも結局念で生き延びさせるのは不可能だと知つて、がつくりきたのだけれど。

「かよ！」

ハツとして顔をあげると、いつのまにか、あたしの前に響くんの優しい笑顔あつた。

「いよいよ明日だな」

響くんが優しく笑いかけてくる。あたしはその笑顔を避けて、こくつと頷くのが精一杯だった。

どうしてそんなにうれしそうに笑つていられるんだりつ。心が痛む。

何も言わず、顔をそらし続けるあたしを見て心配したのだろう。

あたしの横に腰掛け、どうした?と言つよつに顔を覗き込んできた。

「なんで…泣いてるんだ?」

…え?

またしても、あたしの頬を涙が伝つていた。
なんで?

どうして?

わからない。わからないけど、胸の奥がすごく熱い。

涙が後から後から流れてくる。泣いている理由が分からんんだから、泣きやむ方法もわからなかつた。

「…つごめつ…ごめんなさつ…」

その時だつた。それは一瞬の出来事で、あたしは何が起こつたのかも分からなかつた。あたしはぐいっと強い力で引っ張られたかと思うと、響くんの胸の中に抱き寄せられていたのだ。

「…ひびき…くん?」

「…………」

響くんは何も言わなかつた。だけど、まるで返事をするかのように、腕にぎゅっと力が入り、あたしは押しつぶされそうなくらい、強く強く抱きしめられた。

どれくらい抱きしめられていただろう?響くんの腕の中から解放された時、あたしの涙は、もうすっかり渴ききつた後だつた。

「…公園行かないか?」

何もなかつたかのようにそういう言つひと、響くんはあたしの手を取り、

いつものように優しい笑顔を向けた。

その笑顔を見て、あたしの中に強い意志が生まれたのが分かつた。

「……ないで……」

「え？」

「死なないで……！」

それだけ言って、あたしは走り出した。

『かかかかかよちゃん！？』という、フヨのまぬけな声を背にして。ようやく分かった。あたしは、響くんに死んでほしくないんだ。死ぬことが間違ってるから、というだけじゃない。なぜだか分からなければ、響くんだけには、どうしても生きてほしかった。

さつきまでとはうつてかわって、あたしの心は晴れ晴れとしていた。自分の迷いが消えたとでも言うのだろうか。原因は皮肉にも、ターゲットである響くんに、抱きしめられたおかげなのだと思う。今、あたしの目的はただ一つ。
響を助けたい。

それだけだった。

「 11 」

相変わらずあたしは、部屋の前でつまづいていた。伝蔵を呼んできてもらおうにも、瞬間移動できるくせに、フヨはまだあたしに追いついてこない。あたしはまた1・2回も合言葉を失敗していた……あと一回。やばい。でも、早くしないと手遅れになるかもしれない。タイムリミットは明日に迫っているんだから。

しようがない。最後にかけてみよう。もし無理だったとしても、きつとフヨがなんとかしてくれるだろう。楽観的に物事を考えるあたりしだつたが、自分の持つ力をすべて出し切るつもりで口を開いた。

「じ……

「自由を我らに……」

！？

振り向くと、伝蔵があきれたような顔をしてあたしを見ていた。ピーンポーン！と明るい機械音がして扉が開く。

「さすがだよ」

その声は、機械音とはまったく正反対で、どっしり重々しく廊下に響いた……。

そんな人にショックを与えるようなイヤミ、よく思いつくわね！
伝蔵の背中を追いかけながら、心の中で反抗してみた。

あたしの部屋だと、伝蔵は当たり前のように椅子に腰掛け、あたしにも座るように促した。今日は伝蔵だけで、田吾作はないようだ。伝蔵の表情には、昨日見せた人間らしい感情など一つも残っておらず、今までの何の興味も示さない顔にすっかり戻ってしまった。だけど、人間らしい一面があるということが分かってしまっていた。だけど、分かればならないことが分かっていれば、伝蔵の冷たい態度もそんなに気にならなかつた。

伝蔵には、一つ聞いておかなければならぬことがある。もちろん昨日聞きそびれた、『君が自分で考えないと、そうじやないと意

味がない』といつて言葉のことだった。どうして伝蔵がその言葉を知っているのか。「一つ聞きたいことがあるんですけど」「なに?」

相変わらず、何の興味も示さないような顔で冷たく言った。

「昨日、君が自分で考えないと、そりゃないと意味がないっていつたでしょ？あの言葉どうして知ってるんですか？」

敬語なのかそうでないのか曖昧だったが、伝蔵はそして眞にしていない様子で、ちょっと考えるような表情を見せた。そして、あたしの目をじっと見つめた。伝蔵の目は、すべてを見透かすように鋭く、思わず目を逸らしたくなつた。

これが目力っていうやつ？こわ……。

でも、逸らすわけにはいかない、あたしの負けになつてしまつ！変な対抗意識が芽生え、あたしは精一杯、自分の目力を出そうとした。まるで睨んでいるかのように、必死に見つめ返す。

どれくらい戦つただろう？目が乾いて痛くなってきた。たぶん本当は、乾いてないし痛くないのだろうけど、あたしの生前の意識がそれを再現している。

こんな時とかぎつて……！

死神暦の長い伝蔵は、そんな事態に陥るのはないだろ？。ということは、あたしが断然不利な状況ではないか。自分のまぬけさを恨む……。

と、考えたちようじその時、伝蔵はふと目線を下げるやつた！あたしの目力が勝利したんだ！！！

と、喜んだのもつかの間、伝蔵はやつと口を開いたかと思つた、『いい目だ。何かあつたね？』と、全然関係ないことを言つた。

あたしは、『なんで質問返しー？』と考えることもできないほど、ただ焦りまくつた。

何かあつたねつて……。今日あつた出来事つて、一つしかないじゃん……！

あたしは伝蔵に言ひつの躊躇した。伝蔵は、死神のお偉いさんな

んだ。生き返らすなんて言ひたら、止められるに決まつてゐる。だつて、死神のルールに違反して、運命の輪を乱そととしているんだから。

無言でこると、伝蔵が立ち上がり、あたしの傍までやつて來た。そして、座つてゐるあたしの頭を、まるでいい子い子するよつて撫でながら言つた。

「本読んだんだね」

「え…、あ…、うん」

優しい口調の伝蔵と、見た目が子供の伝蔵に、高校生のあたしが子供扱いされることに困惑つた。でも、不思議と嫌だとは思わなかつた。伝蔵がとても暖かく、あたしを包んでくれているよつに感じた。

「君はそのまま、自分の思う方法で迷わず進んでいけばいい。何があつても、今の気持ちを忘れないよつにするんだ」

伝蔵は言葉とは違ひ、とてもつらそうな表情を見せた。そう、それは昨日と同じ感情がこもつた人間の表情だった。

もしかして、あたしが何をしようとしてるのか知つてゐる…？ で

も、なんでそんなに悲しそうな顔をするの？

「じゃあ僕はもう行くよ」

何かを振り切るよつて、突然ぐるりとあたしに向けたその後ろ姿は、今までの伝蔵のものとは違つていた。肩が震えているよつに見えるのは、氣のせいだらうか。

「ま、まつて！」

伝蔵は振り返り、笑顔を見せた。そして何も言わず、ふつと姿を消した。伝蔵の笑顔を見たのはそれが最初で最後、ううん、後にして思うと、伝蔵の姿を見たのが、それで最後だつたのだ。

四〇三 ～初めての本気勉強～

「12」

「つあ、ーーー！」

あたしは終に大声をあげてしまった。その声に驚いた彼は、一瞬手元がくるつてコースアウトしてしまった。

「卑怯者か、お前は！」

ジュゲムに吊り上げられるワリオ+マシンの下を、あたしのペーチ+マシンが追い抜かした。『へへへー』と不敵な笑みを浮かべ、『集中力が足りないんだよ』と無理なアドバイスをした。これくらいしてやつて当前だ。だつてあたしはすでに一周遅れなんだから！…へへへ…。「はい、終わり」

結局、一度も勝てずに夕方の六時になってしまった。

「えー、もうちょっとといいじゃん！だつて今日バイトないんでしょ？」

「バイトないけど、帰りが危ないから無理！」

彼はとてつもなく過保護だ。遊ぶのはいつも六時まで。これじゃあ小学生と同じ時間帯だ。でも、反対しても聞き入れられた試がないので、諦めてしまふし帰る用意を始めた。

「なあ、かよ」

呼ばれて振り向いたあたしに、彼は真剣な表情で言った。

「この間進路書く紙もらつただろ？進路によつて、三年のクラス分けするやつ。あれ明日提出だけど、お前何て書いた？」

あたしはそれに答えることができなかつた。言えば、お叱りを受けること間違いなしだつたから。だから『…まだ書いてない』と嘘を言つた。

「ふうん…」

彼はそう言つと、鞄から自分の紙を出して、あたしに見せて言つた。

「俺はＫ大受けるよ」

「うん、だろうと思つてた」

「俺は…、Ｋ大受けるよ」

「……？うん、頭いいから大丈夫だよ」

「だから…、俺はＫ大受けるって言つてるんだけど」

……？

何が言いたいのか、さっぱりわからなかつた。悩んでるあたしを見て、彼はちょっと間を置いてから言つた。

「俺はいつも、自分で考へないと意味がないって言つけど、考えてその結果、もし俺と同じ進路だつたとしても、俺は怒つたりしないから

から、「

え…？それって…？」

「まだ一年の夏なんだから、今から勉強すれば、かよでも大丈夫だよ

よ

優しい笑顔で彼が言つた。

その日の夜、あたしは進路の紙をそのまま鞄につめた。

はつ…！

気がつくと、あたしは机に向かつたまま、本を枕にしていた。本にべつたりとヨダレがついている…。

しまつた…！読んでいる途中に寝てしまつたらしい。なんでこんな時に寝てしまうのだろう？眠くならないはずなのに、なぜかすぐ眠い。

「フヨ…？」

フヨはまだ帰つてきていないよつだ。そんなに長時間寝ていたわけではないらしい。

ほつと胸をなで下ろし、あたしは本のヨダレを拭き取つた。

“2、生き延びないよつに最後まで慎重に職務を遂行すること”に

は、こう書かれていた。

(1) 念をおろそかにしてはいけない。毎日必ず念を送りに行くこと。念を送る際は、他の事を考えず、その人間の死をひたすら願うこと。長時間考えると飽きてしまうので、その人間の死ぬ手段や方法を色々想像するとよい。

(2) 生き延びさせるつもりがなくとも、あらゆる偶然が重なった場合起こりうる可能性があるため、ここに、それを回避する方法を示しておく。

(このよつな状況を未然に防ぐため、昨年度より、「死亡希望人材予定表」(ターゲット表)に予測靈感度を明記し、難易度をつけることにした。)

まず、靈感のある人間には気をつけなければならない。

軽度の靈感(触れると身震い、寒気などの軽い症状)を持つ人間は除外してよい。

中度の靈感(たまに見える、気配を感じるなどの症状)を持つ人間には、注意が必要である。疲れていたり、精神的に弱っている時は、念のため、近づかない方がよい。

それ以上の重度の靈感(いつでも見える、話せるなどの症状)を持つ人間には、細心の注意を払わなければならず、以下のことに注意しなければならない。

(また、幽体離脱している魂を扱う場合は、その人間本体に靈感がなくても、魂同士で見えてしまって、「重度の靈感を持つ人間」と同様に考えてよい。)

「重度の靈感を持つ人間」は、心靈現象の経験が豊富であるため、すでに幽靈や死神に慣れてしまっている可能性が高い。ほとんどの人間が、普通に話しかけてくると予想される。その場合、「こちらから返事をせず、無視するのがよい。

しかし、触れなければ殺すことができないので、近づく方法を考えなければならない。起きている時は危険なので、眠っている時を狙う方がよい。それも、レム睡眠中は起きる可能性が高いため、ノーレム睡眠を狙うこと。しっかりと時計を見て、ノーレム睡眠に入る時間を計るようだ。

『触れてしまえば安心』というわけではない。ここからが重要である。その人間が『死にたくない』『もつと生きたい』と思つていれば安心なので、近づいて死神界などの話をし、交流を深めてもよい。しかしその人間が、『死にたい』『もう生きていたくない』と思つていれば、注意が必要である。絶対に話をしてはならない。触れてしまつてはいるなら、離れた所から最後を見届けていればよい。

しかし、確率は無いに等しいが、何か例外があり、どうしても話をしなければならない状況にあるなら、『絶対に生きたいと思わせてはいけない』。死を目前にして、自然にそう思つたのならば心配はない。しかし、ターゲットが死神と関わることによつて『生きたい』と思えば、死神にとつて最悪の事態を招くことになるだろう。

難しい文章だつた。伝蔵の言葉の何倍も難しい。きつとこの文章のせいで眠くなつてしまつたのだろう。

本来なら、確實に逃げ出すところだが、あたしは立ち向かわなければいけなかつた。響くんを助けるために。

この文章には、『ターゲットを間違いなく殺す方法』が書かれてゐるのだから、反対のことをしていけば、響くんは生きられるはずだ。

結構時間がかかったが、あたしはこの文章を解読し、『ターゲットを生き延びさせる方法』を見つけることに成功した。簡単にまとめるといい「ひこう」とだろ。

？靈感があつて死神が見えていること

？最初から『死にたい』と思つてること

？死神自身の手で、ターゲットに『もつと生きたい』と思わせること

重要なのは、この三つだ。三つのうち、すでに「はクリアしているので、あと一つ、あたしが響くんに『もつと生きたい』と思わせれば、この条件はすべてクリアでき、響くんは生きる」ことができる。

そして、以前フヨが、一回触れてしまえば、ターゲット表に一度と載ることはないと言つていたことから、あたしが響くんを生き延びさせれば、他の死神が響くんを連れに来るといふこともなく、『あたしが迎えに来るまでずっと、響くんは生き続ける』とこつことになる。

「なにしてるの？ そこまで真剣なかよちやん、初めて見たよ」

突然の声に、あたしは心臓が飛び出しそうなくらい驚いた。いつから居たのか、フヨはベッドの上でボールみたいに口口口口転がっていた。

「あたし、響くんを助けるよ。どんな理由があつても、死にたいなんておかしいと思うから。だから、死神にとりつかれた人間が、どうすれば死神から逃れられるか調べてたの」

あたしは正直に言つた。『今更隠しても仕方ない』という気持ちもあつたが、それより何より、フヨに隠し事をするのが嫌だったのだ。

フヨは一瞬悲しそうな表情を見せたが、すぐに真面目な顔になつた。

「それは違法だよ」と、諭すように呟いたフヨは、今まで見た事ない程、真剣だった。

「そんなこと関係ない。響くんを助けるためなら何でもしてあげる。だって響は……」「

響は……？

響が何……？

…………わからない。ずっと心にひつかつてる何かがある。でも、どうしても思い出せないの。

「…しようがないね」

フヨは意外にも、あたしを止めようとはせず、ひょこヒベッドから起き上がった。

「ボクはかよちゃんのマネージャーだからね。かよちゃんの思つみにすればいいんだ。ボクはそれに従うだけさ」

そう言つて、あたしの前を通り過ぎ、すーっとドアに向かつて行つた。

「ど、どこ行くの？」

あたしは見放されたのかと思った。フヨがいたから、記憶のない状態でも、こうやってやってこれたのだ。フヨがいなかつたら、あたしは何をすればいいのか、どうしたらいいのか何も分からぬ。

「見捨てないで！　ずっと一緒に居て！－！」

フヨは、あたしの大きな声にびっくりしたのか、びょーんと体を縦に伸ばした。

「何言つてんの？響くんを生き延びさせる細工をして」ようと思つただけだよ」

振り返ったフヨは、なぜかほっぺた以外も全部真っ赤になつていた。

それを見て、あたしも真っ赤になってしまったのだった。

三日目～かよの挑戦～

「13」

きれいな星空だった。星の一つ一つが、まるであたし達を祝福しているようにきれいに瞬いている。

初めて彼の背中が意外に大きいことを知った。

やっぱり男の子なんだね。

明日になれば、あたし達はいつも通りに戻ってしまう。だって、彼はこうこうの一番苦手なんだから。

このままどこまでも道が続いていればいいのに。

腕にギュッと力を入れた。

この奇跡に近い状況を、噛み締めるかのように、強く、強く……。

「…よちやん…？」

「うん…？」

「…よちやん！？」

誰かが呼んでる…？

「かよちやん…！」

「…フ…」

頭がぼーっとする…。

「かよちやん、しつかりして…！」

「…え、あ…うん…」

眠い…。瞼が重い…。

「響くんを助けるんでしょう！？起きてよーお願いだから…！」

そうだ、響を助けなきゃいけない…。起きなきゃ。

起きて。

そして響を…

「「めん、かよちやん…！」

「一ーン…………！」

「……つでえ！」

後頭部に激しい痛みが走り、眠気がどこかへふつとんだ。『よかつたあ』と安堵しているフヨの手には、どこから持ってきたのかフライパンが握られていた。あたしはそれを皿などく見つけて、『なにそれ』とフヨを睨んだ。

「……え、いやあ、これはね……」

フヨはフライパンをあたしに見えないように後ろへ隠したが、その黒い物体はしっかりとフヨの体からはみ出していた。

あたしが目を覚ませたのはフライパンのおかげなので、フヨのほっぺたを掴んで、1メートルくらい伸ばす程度で許してあげた。

それでも……。響くんを助けられるのは、今日一日しかないのに、どうしてこんな時に眠ってしまったのだろう。そんな切羽詰つた状況なのに、どうして今でもこんなに眠いのだろう。眠すぎてふらついているのが分かる。

「フヨ……、あたし、なんか……すぐ眠い……」

それを聞いて、普段よりもっと真っ赤になつたほっぺたをさすりながら、フヨはその原因を教えてくれた。

「神経が図太いんでしょ」

フヨのほっぺたが、さらに真っ赤になつたことは言つまでもない……。

あたしとフヨは部屋を出て、昨日響くんと一緒に行つた公園に向かつた。フヨは昨日出て行つた後、響くんのところへ行き、学校を休んで公園に来るよつことお願いしてきたりして。響くんは、どうせ明日死ぬんだからと、快く承諾したよつだ。

公園に着くまでの間も、あたしは睡魔とずっと戦つていた。睡魔は恐ろしく強くて、ちょっとでも気を抜くと、バタッと倒れてその場で寝てしまいそうだ。例え車がビュンビュン通る道でも、安心し

て寝られるなんて得だなあとか、ずっとしようもない考え方をするハメになつた。まあ、それはあたしの癖だから、そんなに負担ではなかつたんだけど……。

「ところで、かよちやん？」

「んあ？」

緊張感のない、間の抜けた調子で返事した。あたしだって、こんな時にこんな馬鹿みたいな声出したくなかったんだけど、眠すぎるんだから仕方がない。「…………まあしょうがないからいいんだけどさ、響くんを生きたいって思わせる方法、ちゃんと考へてあるの?」「えっと……」
「…………考へてないね」

しまつた……忘れてた……もしかして、これじゃあ会つても意味がないんじやない?

あたしは焦つた。そのおかげで、さつきよりだいぶ眠気がひいた。

「どうしよう……」

「かよちやん、うしおちやあ、らしいんだがのう」

「じーさんかよ!」

……こやいや、そんなつっこみしてる場合じゃない。
どうしよう。死ぬのは間違つてるつて云えるだけじゃ駄目だよね。うーん、何か他に……。

その時、あたしはついつい、睡魔との長い戦いに勝利した。ものすごい名案を思いついたのだ。

「そうだ! 魂よ、魂! ……これはいけむ!」

「死にたくて死んだ人に来てもらつて、『やつぱり死にたくないたよー』って言つてもううつてのはどう?」

「そんなの無理だよ」

睡魔に勝つほどの名案なのに、フヨはあつせり却下しがつた。

そして、可哀想な人を見る目であたしを見た。

「それに、それってつまり、他の魂の力で『生きたい』って思つてことでしょ? 死神のかよちやん自身の手で思わせないと無理なんじやなかつたつけ?」

確かにその通りだ。死神自身の手で、ターゲットに『生きたい』と思わせなければいけなかつた。

でも、そもそも死にたい理由聞いてないのに、方法なんて思いつくのだろうか？

『死ぬのは間違つてる』つていうのが根本的にはあるけど、例えば、『いじめられて死にたい人』と『何か大きな罪を犯して死にたい人』とでは、死にたくないと思わせるのに、多少違いが出ると思う。

結局その方法は、響くんの『死にたい理由』を聞いてから考へることにした。フヨはそれを聞いて、『大丈夫かなあ』と不安な目であたしを見ていた。

学校の前を通り、公園へ向かつ。今日の学校の風景は、まだ授業中ということもあって、昨日までとは全然違つっていた。校舎には重々しい雰囲気があつて、生徒を守るという使命に燃えているようだつた。

グラウンドで体育の授業をしているクラスがあるので、遠くの方で、人の話し声と笛の音が聞こえる。あたしは『おはようござります』と校舎に礼をして、足早にその場を通り過ぎた。

公園について、入り口にある時計を見ると、午前10時をちょっと過ぎていた。響くんが、怪しまれないように登校時刻に家を出でいるとすれば、一時間以上待つてことになる。

待ちくたびれて帰つてたらどうしよう…！あたしはせうに足を速め、響くんを探した。

あたしが握手したのは、学校が終わつて下校時刻だったということから、早く見積もつても、三時半頃だろう。ということは、あと残り五時間。この間に響くんに『生きたい』と思わせなければ、響くんは死んでしまう。早くしなければ、手遅れになるかも知れない。

野球ができるくらい広い運動公園なので、手当たり次第に探すといつても、かなり時間がかかる。あたしは一番可能性の高いところから探ししていくことにした。まず向かったのは、この間話をしたベンチだった。だけど、そのベンチにも、他のベンチにも響くんは居なかつた。運動場の周りにあるベンチにも、響くんの姿はなかつた。

一体どこに……？

不安に駆られたその時、キイ……キイ……という音が聞こえた。音の方へ行つてみると、ブランコに誰かが座つているのが見えた。近くにつれて、それが響くんだとこいつことが分かつた。

響くんは、ブランコのちょうど正面にある砂場を、じっと見つめている。砂場では2、3人の子供が、穴を掘つたり山を作つたりして遊んでいる。平日の昼間だということもあって、遊んでいるのは、まだ幼稚園に入るか入らないかの小さな子供たちだつた。砂場の横にあるベンチには、子供たちの親が座つておしゃべりをしていた。響くんは、あたしとフヨに気づくと嬉しそうに笑つて、手でおいでをした。

誘われるようにならのブランコに座り、フヨはあたしの膝の上に乗つた。響くんの満足しているような表情は、あたしをますます傷つけた。フヨに『聞いていいかな?』という田線を送ると、ウインクを返してきたので、あたしは本題に入ることにした。

「あの……前にも一回聞いてるんだけど、なんで死にたいなんて思うの?」

おずおずといった感じで、響くんに問い合わせた。響くんは満足した表情を崩すことなく、『それはもうちょっとしたら話すよ』と言つた。

こう言われてしまつては手立てがない。あたしはフヨに田配せをしてから、ひとまず根本的な話である、死ぬのは間違いだという話をすることにした。

「あの、死んだらね、何にもなくなっちゃうんだよ。絶対後悔すると思つし、やつぱり生きてる時が一番だつて気がつくと思つの」

その言葉に、響くんはちょっと考える表情になり、あたしから田を逸らして、また砂場で遊んでいる子供たちの方に目をやつた。あたしは何も言わず、響くんの返事を待つた。

「…逆に聞くけど、佳代自身はどうなんだ？死んで後悔してるのか？生きてる時が良かつたって、生き返りたいって、そつ思つ？」

え……。

何の前触れもなく、砂場を見つめたまま響くんが言つた。

あたし…？あたしは…

あたしは死んで後悔しているのだらつか？生き返りたいと思つていいのだろうか？

…………。

分からなかつた。生き返りたいと思わないことはないけど、生き返りたくない気持ちの方が強いようと思つ。失くした記憶が、生き返るのを頑なに拒んでいる。

でも、あたしのことはいい。

今は響くんのことなんだから。

あたしは『もちろん生き返りたいと思つよ』と嘘をついた。嘘も方便だといつ言葉がある。今がその時だと思つた。

「…そうか」

響くんは、まっすぐ砂場を見つめたままだつた。

そして突然、ブランコから降り、優しく微笑んだ。

「死にたい理由話すよ。ちょっと長くなるから…、ベンチに行かな
いか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8457c/>

死神が天使にかわる時

2010年12月5日04時22分発行